



卓 話

「アジアとアフリカ：国際協力の現場で覗いたこと」

元JICA職員 阿部 憲子氏

ODAの一端に関わって30年余り。国内で海外で、開発途上国に対する協力の仕事に携わりました。アジアとアフリカでの国際協力の経験を通じて垣間見たこと、考えたこととお話したいと思います。世界中の多くを占める開発途上国への理解に役立てていただければ幸いです。



＜はじめに：開発途上国とは＞

世界にある国は194ヶ国(注i)、そのうち、およそ150ヶ国が開発途上国とされている。経済や産業、技術などが遅れている開発途上国では人口増加、貧困、保健医療や教育水準の低下、交通・通信・電力・病院・学校などの社会・経済インフラの未整備、環境破壊などの多くの問題を抱えているのが現状である。OECD(経済協力開発機構)のDAC(開発援助委員会)(注ii)では援助受取国・地域リストに記載される国々を開発途上国とし、後発開発途上国(LDCs)、低所得国(LICs)、低中所得国(LMICs)、高中所得国(UMICs)に分類(注iii)している。一人当たり国民総所得(2004年実績)を分類の基準とし、LDCsはUS\$750未満で50ヶ国、LICsはUS\$825以下で18ヶ国、LMICsはUS\$825～3,255で49ヶ国、UMICsはUS\$3,256～10,065で38ヶ国がそれぞれ含まれる。

(注i) 国連統計の主要国際機関加盟国(2005年)に基づく。194ヶ国のうち国際連合加盟国は191ヶ国。

(注iii) OECD: Organization for Economic Cooperation and Development, DAC: Development Assistance Committee. OECDは先進国間の自由な意見交換・情報交換を通じて、(1)経済成長、(2)貿易自由化、(3)途上国支援に貢献することを目的とする国際機関で本部をパリに置き、加盟国は30ヶ国。

(注iii) DACの2005年統計による分類。LDCs: Least Developed Countries, LICs: Low-Income Countries, LMICs: Low Middle-Income Countries, UMICs: Upper Middle-Income Countries.

＜我が途上国体験＞

途上国体験は1970年のラオス王国に始まった。その後、1972-1973年、そしてインドシナの激動期にあった1975年、全土解放に伴う王国の終息から新生「ラオス人民民主共和国」への移行を見極め、1978年4月まで続いた青年海外協力隊員の活動支援に関わった。社会主義体制下での協力隊派遣は日本の技術協力史上ラオスが初めてである。

1992年から94年まで在カンボディア大使館に赴任し、経済協力業務に携わった。インドシナの中で最後まで政情が混沌としたカンボディアは1991年にパリ和平協定が成立し、1992年、他のドナー国に先駆けた日本のカンボディア復興支援が開始される時期であった。国連暫定機構の下で和平プロセス(武装解除、難民帰還、総選挙実施)が進むなかで日本からもPKOが派遣された。

アフリカは東アフリカのケニア(1982-84年)、西アフリカのニジェール(1986-89年)とコートジボアール(1997-2000年)に勤務する機会を得た。コートジボアール在勤中は兼轄としてトーゴ、ベナン、ブルキナファソのそれぞれに関わった。いずれもアジアからは遠く馴染みの薄い国々である。

東アフリカと西アフリカの当該国では旧宗主国イギリスとフランス、気候・風土などの影響による国情の大きな違いを実感した。ケニアでは1983年7月に、コートジボアールでは2000年12月にそれぞれクーデタに遭遇した。政情の不安定さは途上国の多くに共通する問題ではあるが、アフリカ地域でもその例外ではなく、部族間抗争や国民の経済的不満が国家政権の急変を触発する要因となり易い。

至近の海外勤務はラオス(2000年9月から2年間)(注i)とタイ(2002年12月から2年半)(注ii)で、それぞれ技術協力プロジェクトの運営に携わった。タイでのプロジェクト現場は東北部の中心地・コンケン県にあり、ラオスとは経済・文化の両面で至近距離にある。経済発展を自負するタイが近隣国CLVMと関わる推移がよく視えた。インドシナとミャンマーを含む地域をCLVMと呼ぶようになったのはそれらの国が市場経済に移行し、ASEAN加盟を果たした後、1999年頃からである(注iii)。

(注i)「ラオス国立大学経済学部及び日本人材開発センター支援プロジェクト」

(注ii)「タイ国外傷センタープロジェクト」

(注iii) ASEAN加盟は1995年にベトナム、1997年にラオス、カンボディア、ミャンマー。

<途上国への視点>

1) 文化の多様性と価値観

どの国、どの地域にも歴史・風土に裏付けられた独自の文化があり、それを背景とした人々の考え方と価値観がある。経済を計るものさしはあるが、文化を計る尺度は無い。特に、途上国では文化に対する関心と敬意を示すことが現地の人々との潤滑油となり得る。

2) 開発プロセスの順列と不順列

途上国では農業、保健医療、教育、社会基盤、経済などの分野で多くの問題が混在し、各分野における基盤整備、人的資源の開発・育成、技術水準の向上、雇用創出等々、解決すべき課題は多面的で、様々な要素が絡み合っている。

今や途上国においてもコンピュータ機器が一般化し、IT化が急速に進む時代に在って、かつて先進国が発展を遂げてきた順列的なプロセスとは異なる発展過程を辿るのかもしれない。

<途上国支援・協力を際して留意すべきこと>

1) 実施の前に調査・情報収集などによって現地の状況を把握し、その計画が妥当であるかを十分に検討する。

[受益者側ニーズの緊要度(プライオリティー)、現地の要望が一部個人の発意に止まっているか、行政との関わりはあるか、ドナー側の意向と合致するか、・・・]

2) その協力・支援が現地受益者の自助努力や持続的発展の契機となるか、思いつきのチャリティーは人々をスポイルすることが多い。

3) 実施後の定点観測を行う(モニタリング)。